

## 『オセロー』における報道とセレブリティ\*

---

中村未樹

---

*The New Republic* の associate editor, Stephen Glass は *Rolling Stone* など多くの有力雑誌にセンセーショナルな記事を寄せ、ワシントンのジャーナリズム業界においては新進気鋭のレポーターとして注目されていた。だが、1998年になって、意外な事実が明らかになる。すなわち、1995年12月から1998年5月の間に Glass が *The New Republic* に書いた41の記事のうち、27の記事に捏造箇所が含まれていたのである。例えば、“Hack Heaven” というレポートの中で彼が紹介した少年ハッカー Ian Resil, Jukt Micronics というソフト会社、その電話番号、メールアドレスは全て架空のものであった (Bissinger 176-85)。Glass はレポーターとして事実を伝えるのではなく、事実を作り出したのである。この事件はジャーナリズム史上でも類を見ない偽造報道としてニュースになり、さらには2003年、*Shattered Glass* というタイトルで映画化されることになる。

この騒動は、現代社会における報道に関する一つの問題を提起している。事件の報告者 Buzz Bissinger は、Glass の動機について次のように推測している。“He apparently wanted to present something better, more colorful and provocative, than mere truth offered.” (180) 読者を楽しませるために故意に脚色された、刺激的なニュースを提供するか、あるいは、ありのままの真実を伝えることをその任務と捉えるべきか——このいわゆる商業主義的センセーショナリズム、「面白主義」(原 iv) と、事実報道という両極の狭間で現代の報道は揺れ動いているのである。商業的観点から見れば面白主義は必要であろうが、行き過ぎれば読者の信用を失う。一方で、事実報道は倫理的に望ましいス

タンスと言えるが、時には読者を退屈させるかもしれない。このような葛藤は報道の現場に携わる多くの人々が共有するものなのであろう。Glassの過ちは、“nonstop yearning to please” (Bissinger 186) という彼自身の性向も相俟って、その一極へと走った点にある。

現代社会における報道に関する上記の問題は、『オセロー』を新たに読み直す上での重要な手掛かりとなる。16世紀の英国社会、『オセロー』、そして現代社会は、報道というテーマを軸として繋ぎ合わせることが可能となるのである。

16世紀末の英国においては、「報道」の萌芽を見出すことができる。そのきっかけとなったのは、1589年から1593年にかけてフランスで起こった内乱であった。Henry 四世とカトリック陣営との戦争において、英国は国王側に援軍を送ることになる。フランスでの戦況は本国に逐次報告され、その際に出版されたのが news pamphlets と呼ばれる冊子であった。現存するものはおよそ60種類であるが、この一連の報道が英国におけるジャーナリズムの始まりであると Paul Voss は指摘している (1, 4, 61-62)。Voss の見解に従うならば、1590年代は “news revolution” (15) が生じた歴史的瞬間であるのだ。

実際、当時の英国におけるニュースへの関心を私たちは垣間見ることが出来る。まず、OEDによれば、“news” という単語が “[t]idings; report or account of recent events or occurrences, brought or coming to one as new information; new occurrences as a subject of report or talk” という意義で一般に用いられるようになったのは1500年以降のことである (OED news 2.a.)。また、1592年に出版された Thomas Nashe の “Pierce Penniless His Supplication to the Devil” には以下のような一節がある。“I was informed of late days, that a certain blind retailer... to be a greedy pursuer of news...” (56)。Nashe が記録したのは、ニュースを貪欲に追い求める人という新しい人種である。ニュースが人々の興味を強く引くようになっていたのである。Sandra Clarkはこのような世間の状況を次のように要約している—— “[I]n the latter half of Elizabeth’s reign interests in news of many kinds was on the increase...” (86)。ニュースへの関心、これこそが当時の英国の流行であったのである。こうして、16世紀末の英国は、ニュースが作られ、そして受容されていく「ニュース社会」へ

と変容していくことになる。

1603～1604年頃に制作された『オセロー』においては、この同時代の英国ニュース社会のダイナミズムが援用されている。<sup>1</sup> 実際、劇においては、“news”, “report”, “tidings” という語が多用されている。シェイクスピアは、当時のニュース社会と劇世界の相互参照性をほのめかすかのように、これらの言葉を意識的に用いているのである。

本論では、『オセロー』における報道の様相を、同時代の状況、そしてさらに現代社会におけるメディアとセレブリティの問題を参照しながら考察する。現代におけるセレブリティに関して、Graeme Turner は次のように定義している。“Modern celebrity then, is a product of media representation.... Celebrity, then, is a genre of representation and a discursive effect.” (強調 Turner; 8-9) セレブリティとはメディアにおける表象の産物なのであり、メディアによって形成されるものなのである。同様に、Chris Rojek もセレブリティの形成において “mass-media representation” が鍵になると指摘している (13)。この現代社会におけるメディアとセレブリティの相関性の構図を踏まえた上で、『オセロー』における報道の状況を二つの側面から分析していきたい。まず第一に、報道される側の問題についてである。先述したように、メディアによってセレブリティが生み出され、人の名声が確立されていく。結果的に、ニュース社会の人々は、自分の名声を左右するメディアに意識的にならざるをえない。後述するように、劇の主人公である Othello はまさにこの価値観によって動かされている。ヴェニスの有名人、セレブリティである彼の運命は、メディアと名声の相互依存的関係性の中において規定されていくのである。第二に、報道する側の問題についてである。ここでは特に、劇においてレポーターとして活躍する Iago に焦点を当ててみたい。偽りのレポートを提供し、事実を捏造する Iago は、先述した Glass の先駆的キャラクターとして捉えることができる。彼は自らのある特異な野心を成就させるために Othello を利用し、最終的に彼に関するニュースを世間に提供することになる。レポーター-Iago の行動を考察することによって、ヴェニスにおける報道の独特の在り方を確認することができるであろう。

ここで、一つ注意しておかねばならないのは、『オセロー』においては新聞、雑誌、あるいは冊子など、いわば目に見えるような形のメディアは存在しないという事実である。また、Iagoによるレポートも全て「語り」であり、文字として記録されたものではない。だが、このようなメディアの実体的様相の欠如を踏まえた上で私が主張したいのは、劇のキャラクターたちの中に「報道」の根幹をなす意識——ある出来事を報告することでその出来事に公共的性格を与えようとする意識、そして自分に関する事が公共の場で報道されるという事への意識——が芽生えてきているということなのである。<sup>2</sup>『オセロー』において、この公共性への意識を表すメディアとなるのは、「報告」、つまりレポートという形での報道、そして世間の人々の見解、つまり世評である。キャラクターたちの意識をそれぞれ検討していくことによって、ニュース社会における彼らの位置と機能を特定していくことが可能となるであろう。

劇の舞台であるヴェニスには、16世紀においては東西の交易が行われる国際的な商業都市国家として繁栄していた。また、オスマン帝国に対抗するキリスト教社会の砦としての軍事的拠点にもなっていた。<sup>3</sup>そこでは、物、人の流れが活発であり、情報、あるいはニュースの流れもそれに従って活性化されていくことになる。例えば、1幕3場においては、トルコ艦隊の動向のニュースが逐一速報として元老院で報告されている(1-35)。ヴェニスにおいては、ニュースは絶えまなく作られていくのである。そして、ヴェニスの市民も、ニュースに対する飽くなき関心を見せている。トルコ艦隊壊滅を伝える紳士の言葉、“News, lads! Our wars are done...” (2.1.20) に、彼らのニュースへの熱い欲求を読み取ることが出来るだろう。ヴェニス、そしてキプロスは、ニュースという商品が作られ、受容されていくニュース社会として明示されているのである。<sup>4</sup>

このようなニュース社会においては、先に述べたように、名声を左右するメディア—報告と世評—が主要な関心事となる。世間で自分がどのように報告され、評価されるかということを入人は常に懸念するのである。それは、キプロスでの最初の晩の騒動で失職した Cassio の言葉に端的に表されている。“Reputation, reputation, reputation! O, I have lost my reputation! I have lost the immortal part of myself, and what remains is bestial. My reputation, Iago,

my reputation!” (2.3.242-44) Cassio にとって世評、そしてそれに由来する名声は自己を構成する本質的なものなのである。この執拗なまでの思い込みが、ニュース社会に生きる人間の性であると言えよう。また、劇において、登場人物たちがそれぞれに特徴的な形容詞を伴って言及されていることにも触れておきたい。例えば、Othello の場合は、“valiant”, “noble”, “brave”, Desdemona の場合は “chaste” として形容されている。名声が重視されるヴェニスにおいては、このような性質を示す「肩書き」が重要であるのだ。そして、「肩書き」を重視する社会において、中傷されることは致命的であると言える。（「中傷」を意味する “abuse”, “slander” は劇の重要なキー・ワードである。）こうして、ニュース社会の人々は、名声と中傷の力学に左右されることとなる。

特に、主人公である Othello は、このヴェニス独特の力学に大きく影響を受けることになる。元々、傭兵隊長としての彼の名声は、ヴェニスにおける世評によって作り上げられたものである。例えば、Othello にかつて仕えた Montano は次のように述べている。“[T]he man [Othello] commands / Like a full soldier.” (2.1.35-36) このような人々の見解が彼の名声を生み出したのである。また、Othello がキプロス総督の地位を得たのは、「世論」（“opinion” 1. 3. 222）の後押しによるのだ。その意味において、Othello はメディアの恩恵に与っていたと言える。この武人としての名声とともに、ムーア人という人種的特異性もあいまって、彼は世間の大きな注目を浴びざるをえない。結果的に、ヴェニスの有名人、セレブリティとなった Othello は、名声と中傷、賞賛とバッシングという形で、報道されることのメリットとデメリットの双方を経験していくことになる。

ここで、セレブリティとしての Othello という側面について詳しく検討しておきたい。セレブリティという点は、劇を理解する上での重要なファクターなのである。このことの証左として、『オセロー』と関連する映画、そして一つの事件を参照する。まず、2001年に制作された現代版『オセロー』である O（『オー』）。この作品では、舞台はアメリカの prep school に置き換えられている。Othello 役である Odin はバスケットボールの花形選手であり、学校の有名人である。Iago 役の Hugo は Odin を妬み、彼を嫉妬、そして破滅へと導いて

いく。さて、映画の結末において、事件が公けとなり、テレビカメラに追いか  
けられながら警察に連行されていく際に、Hugo は次のように語る。“One of  
these days everyone’s gonna pay attention to me.”<sup>5</sup> Hugo の心の内には、  
Odin と同じような有名人になりたいという願望、つまりセレブリティ願望が  
あったのである。(彼の願望は、犯罪者としてメディアで報道されるという意外  
な形で成就されたことになる。)この映画の脚本を書いた Brad Kaaya は、Hugo  
の動機、そして彼と Odin の関係をセレブリティという軸において解明したの  
である。

次に取り上げたいのは、『オセロー』との関連性を指摘されることの多い O. J.  
Simpson 事件である。<sup>6</sup> 確かに、両者の間には、嫉妬深い黒人の夫と白人の妻、  
そして夫による妻の殺害といった共通項がある。だが、ここで特に強調してお  
きたいのは、Simpson が元々有名人であった、という事実である。彼はかつて  
フットボールの大スターであり、コマーシャルや映画にも出演している。カリ  
フォルニアの豪邸に住む富裕な彼は、多くの黒人にとっては憧れの対象であり、  
英雄でさえあった。このような条件が、人種問題と並んで、報道の過熱化を引  
き起こす一つの要因になっていたのがある。つまり、有名人であるから報道され、  
報道されればさらに注目され、注目度が高まればさらに報道されるというメ  
ディアと名声の相乗効果現象が生じていたのである。<sup>7</sup> この事件においても、メ  
ディアと名声との密接な関係性が確認できる。以上二つの例を参考にするなら  
ば、『オセロー』を読み解く上での重要な鍵は、名声、そしてメディアという点  
に求められるのである。

ここからは、劇におけるレポーターである Iago について見ていくことにし  
よう。まず、彼のレポーターとしての三つの基本戦略について述べておきたい。  
第一に、レポーターとしての彼を特徴付けるのは、事件を求める好奇心である。  
Iago は自分を次のように分析している。“O, gentle lady, do not put me to’t,/  
For I am nothing if not critical.” (2.1.117-18) “critical”, すなわち「あらさ  
がし」に長けていること、このジャーナリストとしての「いやらしさ」を Iago  
は備えているのである。第二に、事件に対する洞察力である。Iago には、人の  
欠点や弱みを意地悪く見出し、そのニュース価値を査定する独特の才能がある。

I do beseech you,  
 Though I perchance am vicious in my guess —  
 As I confess it is my nature's plague  
 To spy into abuses, and oft my jealousy  
 Shapes faults that are not.... (3.3.145-49)

世間の人々の“abuses”に探りを入れ、それをニュースとして商品化すること、そして時には「ありもしないあやまちを作り出す」ことがIagoの仕事である。例えば、劇冒頭において秘密裏に行われたOthelloとDesdemonaの結婚を特ダネとして最初に舞台で公けにするのはIagoである。この際も、Iago独自のカンが働いたにちがいない。つまり、Othelloはヴェニスの有名人であり、一方Desdemonaは元老院議員の娘、つまり良家の出であるから、二人の結婚はセレブネタになる。また、親の承諾を得ていない異人種結婚という点でも話題性に富んでいる。以上の点から、この事件は人々の好奇心を掻き立てるにちがいないと判断したのであろう。まして、一部の関係者しかこの事は知らないから、その点でスクープになりうる。この秘密結婚のニュース価値の高さを、Iagoは察知していたのである。

三点目として、忘れてはならないのは、Iagoのレポートに一貫するセンセーショナリズムである。自分のニュースの売り込みに励む彼は、ニュースを娯楽として提供する、いわゆる「面白主義」に専念する。ヴェニスの路上で、Iagoは二人の結婚を扇動的な見出しでもって報告する。

Call up her father:  
 Rouse him, make after him, poison his delight,  
 Proclaim him in the street, incense her kinsman  
 .....  
 Even now, now, very now, an old black ram  
 Is tugging with your white ewe. Arise, arise.... (1.1.68-90)

「白羊に乗った黒羊」という隠喩は、その愉快的猥雑さも相俟って、Brabantioのみならず他のヴェニスの住人たちをも眠りから起こさずにはおれない吸引力を持っている。Iagoの独占情報は、深閑としたヴェニスに衝撃を与えるのである。また、ここで付記しておきたいのは、Iagoが上の報告において事件の「まさに今」(very now)という性質、言い換えれば「同時性」を強調していることである。この同時性という特徴にこそ、16世紀の英国におけるnewsという概念の成立を確認することができる(村上 48)。同時性を人々に共有させたいという意識と、人々の同時性への欲望——この両者の交流の中で、ニュースは作られていくのだ。同時性を強くアピールするIagoは、ニュース社会の申し子なのである。

このように見ると、Iagoという人物は、報道というものが持ついやらしさ、意地の悪さ、そして面白さを一身に体現しているように思われる。そして、最後に付け加えておきたいのは、彼のレポーターとしての根本的な認識の在り方である。先述した場面で、自らの名声の下落を嘆くCassioに対して、Iagoは次のように言う。“Reputation is an idle and most false imposition, oft got without merit and lost without deserving.” (2.3.247-48) Iagoは、世評、そして名声はあてにならないものであり、恣意的に操作しうるものであるとみなしている。名声は如何様にでも作り変えられるのだ。名声を自らを構成する本質的なものとして語っていたCassio、そして後述するOthelloとは極めて対照的な立場であると言える。まさにこのような認識的差異によって、Iagoはニュース社会において彼らより優位に立つことが可能となるのである。

それでは、Iagoの活動について具体的に考察していくことにしよう。キプロスでの最初の晩の騒動において、彼はレポーターとして前景に現れる。

Yet, I persuade myself, to speak the truth  
 Shall nothing wrong him. This it is, general:  
 .....  
 More of this matter can I not report.... (2.3.204-21)

Iago は「真実を語る」レポーターとして自らを装う。劇においては、Iago に関して“honest”という形容が頻繁に用いられているが、ここではその「真実を語る」という意義に焦点を当てたい (*OED honest* 3.c.)。<sup>8</sup> この場面では、Othello を始めとして誰もが Iago を“honest”，つまり真実を語る者として信用し、そのレポートの信憑性を問わないのである。だが、実際には、Iago は真実を語ってはいない。例えば、Desdemona を追ってきたストーカーの Roderigo を彼がけしかけて騒ぎを起こさせたという事実は秘密にしているのである。このように、劇において Iago は、“honest”の仮面をしながら嘘の情報を巧みに提供していくことになる。

この後、Iago は Cassio に対する negative campaign を開始する。彼は Cassio と Desdemona の間の「ありもしないあやまち」を捏造するのだ。そこには、以前の副官昇任人事をめぐる個人的な恨みと、Cassio を排除することで自分が副官になりたいという出世願望が作用していたと考えられる (1.3.375-76)。また、妻と Cassio との関係への疑心も関与しているにちがいない (2.1.288)。だが、別の観点から見ると、Iago のジャーナリストとしてのある特異な欲求が関わっているように思われる。このことを考えるためには、まず劇世界の状況について確認しておかねばならない。トルコ艦隊の壊滅によって、ヴェニスとトルコとの戦争は回避された。このトルコ艦隊襲来の情報は、それまでは時事的ニュースとしてヴェニスの人々の関心を一度にさらっていた。このニュースは誰もが注目していた国民的話題であったのだ。しかし、トルコの脅威が去った以上、もはやこのニュースは時事性を失い、商品としての価値も消滅する。Dennis McQuail の言葉を借りるならば、ニュースは“perishable”(139)であって、出来事が現に起こっている間しか生命を保てないのである。結果的に、ヴェニスのニュース市場には空白が生じ、人々は新たなニュースを希求することになる。Iago は、このヴェニスの人々の欲求に応えるために、新しいニュースを作り出そうとしたのかもしれない。それは、Othello と Desdemona の二人に関するニュースである。この有名人夫婦は時の人であり、人々の関心は高い。ニュース価値の動向の予測に長けている Iago は、このニュースはきっと売れるにちがいないと判断したのであろう。果たして、Iago は Cassio という第三者

を絡ませながらこの夫婦のニュースを作っていくことになる。ジャーナリストとしての Iago は、事件を報道するだけではもはや飽き足らなくなり、事実、そしてニュースを自ら作り出そうとするのだ。つまり、Glass と同様に、Iago は「伝える」ことから「作る」ことへと手を伸ばすのである。こうして Iago は、レポーターからプロデューサー・ディレクターへの転身を図る。

Iago は Cassio と Desdemona の姦通という「事実」を捏造し、Othello に報告する。そのレポートの様式と内容を確認しておこう。Iago は二人の浮気の証拠として Cassio の言葉を引き合いに出す。“In sleep I heard him say, ‘Sweet Desdemona, / Let us be wary, let us hide our loves.’” (3.3.420-21) ここで、Cassio の寝言が発言記録としてそのまま引用されていることに注目したい。このような直接話法のスタイルは、報道においては内容の信憑性を高めることになる（浅野 76-83）。さらに、4 幕 1 場において、Iago は Cassio へのインタビューの現場に Othello を立ち合わせる。これは直接話法の究極の形式といえよう。

また、Cassio と Desdemona が情を通じ合わせることは、その人種が同じであることから十分可能であると Iago は語っている (3.3.230-40)。ここで、Johan Galtung と Mari Holmboe Ruge は、ある出来事がニュースになるための条件の一つとして、その出来事が人々の予測に合致すること、つまり “consonant” であるということを挙げている (65)。この見解を参考にするならば、二人の姦通は「協和性」が高く、人々の予測にかなっているということが彼の論旨であるのだ。このように、Iago は自分の持ち込むレポートに対する世間の反応も参照した上で、その内容の信憑性を確立していくのである。

果たして、Iago の “honest”，つまり「真実を語る」という肩書きを疑わない Othello は、その巧みに作りあげられたレポートを信用してしまう。Othello の “Thou [Iago] shouldst be honest” (3.3.382) という思い込みは一貫して変わらないのだ。彼が何故このように安易に騙されてしまうのかという問題、その “precarious credulity” (Moisan 51) についてはこれまで度々議論されてきたが、ここでは彼の名声に対する強い意識が大きく作用しているということをまず指摘しておきたい。ヴェニス の有名人である Othello は自分の名聲に常に意

識的であり、この点では特に敏感になっている。そのような彼であるから、妻の浮気という醜聞は、たとえ可能性であったとしても、自分の名声に関わる問題として看過することはできない。もしこの件が真実であるならば、ニュース社会に生きる彼にとっては致命的であり、そこに待ち構えているのは“cuckold”という屈辱的な肩書きと世間の嘲りである。Iago は、名声に固執する Othello の心理にうまくつけこんだのである。

また、報道に対する Othello の関わり方にも問題が潜んでいる。Iago の言葉を借りれば、彼の嫉妬は“unbookish jealousy” (4.1.99)、つまり「世間という本を知らない」ゆえの嫉妬である。世間という本、言い換えれば情報の集合体の批判的読解能力に Othello は欠けていたのである。そういえば、Iago は自分のレポートをあくまで「推測」 (“guess” 3.3.146; “inference” 3.3.185) として語っていた。また、劇の最終場面において彼は次のように釈明している。“I told him what I thought, and told no more / Than what he found himself was apt and true.” (5.2.175-76) Othello は、「事実」と「推測」の区別が出来なかったのである。全ての報道を“true”として無批判に信じてしまうこと——これが、彼を破滅に導いた一つの要因なのである。Othello の嫉妬は報道の実状に疎いがゆえの産物であるのだ。

後知恵的に考えれば、他の点でも Othello の態度には手落ちが見られる。第一に、彼は Iago のレポートのニュースソース (情報源) を確認するという作業を省いている。この点は、Othello が Iago を「信頼すべき筋」(浅野 66) とみなしていたという事実とも関連してくる。第二に、彼は Iago からの伝聞のみに依存し、第三者、例えば Emilia からの反論 (4.2.11-18) を判断材料にすることはなかった。以上の点を踏まえた場合、Othello が Iago の策略に翻弄されたということは全く自然なことであると思われるのである。ただし、この二人を注視する観客の批判的洞察が劇においては常に存在しているということを忘れてはならない。この点については論の結末において詳述する。

こうして、Othello は、「寝取られ男」という架空の中傷に苦悩することになる。彼は、ディレクター Iago の下で愛憎劇を演じる役者に成り下がったのである。(ただし、皮肉なことに、まさにこの状況において、Othello が潜在的に持つ

ていたパフォーマンス能力が見事に開花することになる。)ここで、Iago自身が、かつて妻 Emilia の不倫疑惑に苦悩していた、という事実を思い出しておきたい(1.3.369-72; 2.1.276-80, 288)。この Emilia の不倫に関するニュースソースは劇においては明らかにされていない。Iago は、ヴェニスにおける無責任な報道の(おそらく)最初の犠牲者だったのである。そして、このような過酷な体験を経ることによって、Iago は恐るべき情報家へと変貌したのである。

Iago のレポートによって、Othello は “noble” から “cuckold” へ、Desdemona は “chaste” から “whore” へとその肩書きが変化していく。Iago は二人の名声をいとも簡単に操作するのだ。この変化に従順に従う Othello は、妻に罵声を浴びせる “Was this fair paper, this most goodly book, / Made to write ‘whore’ upon?” (4.2.70-71) Desdemona は、Iago が、そして彼に倣って Othello が勝手に記事を書き込める “fair paper” になってしまうのである。ここでは、彼女はヘッドライナーとして皆に注目されることになるのだ。

Iago のレポート活動とその結果を踏まえた場合、ヴェニスにおける報道の在り方を要約することができる。そこでは、セレブリティの動向、そして彼らに関する「ありもしないあやまち」がニュースとして無責任に提供され、人々を楽しませることになる。ヴェニスのセレブリティは、このニュースの提供者と受容者との間のいびつな共犯関係の犠牲者であるのだ。むろん、自分に向けられた中傷に対して異議を申し立てる機関、現代の英国で言えば Press Complaints Commission (PCC: 報道苦情委員会) のようなものは存在しないから、Desdemona はただ泣き寝入りするか、もしくは別の、つまり面白主義者ではなくて本当に「真実を語る」事実報道主義のレポーターの登場を待つしかないのである。<sup>9</sup>

果たして、その本当の意味において “honest” であるレポーターは、意外なところから現れることになる。劇の終幕において、Emilia は事実を報告する。“I must needs report the truth... And your reports have set the murder on” (5.2.129-86)。この暴露発言によって、事件の「真実」が遂に明らかにされる。言ってみれば、Iago はレポーターとして妻に出し抜かれたのであり、彼女の提供するスクープによって Iago のレポートはその信憑性を失い、彼のレポー

ターとしての信用は失われる。だが、結末における舞台の状況を見れば、Iagoのプロデューサー・ディレクターとしてのたくらみは大成功したと言える。“Look on the tragic loading of this bed: / This is thy [Iago’s] work” (5.2.359-60)。この悲惨な事件は、まさにIagoの「仕業」であり「作品」であるのだ。プロデューサー・ディレクターIagoにとっては会心作なのである。

Othelloはショッキングな殺人事件の犯人となる。現場に駆けつけたLodovicoに対して、彼は次のように弁明する。“An honourable murderer, if you will; / For naught did I in hate, but all in honour.” (5.2.291-92) この台詞には、名譽、そして名声に対する彼の執拗なまでのこだわりが窺える。Othelloは自己の名声に固執するあまり報道の傀儡となり、そしてさらに、今度は殺人犯として世間の注目を新たに集めることになるのである。こうして、Othelloは、ニュースの客体として報道の中に取り込まれていく。

この事件は、Lodovicoによって元老院に報告され、おそらく世間においてもなんらかのパンフレットが出回ることになるであろう。そのヘッドライナーになるのはもちろんOthelloである。次のような見出しが目に浮かんでくる。

News from Cyprus. Othello murdered Desdemona,  
and then killed himself.<sup>10</sup>

こうして、かつての名将Othelloはヴェニスの人々の野次馬的な関心に晒されることになるのである。その意味において、彼はニュース社会ヴェニスの犠牲者である。“A bad news is a good news”という言葉があるが、この「悪いニュースほどよく売れる」という原則に従うならば、このパンフレットは飛ぶように売れるにちがいない。

それでは、このニュースの受容者となるヴェニスの人々は、この事件に対してどのように反応するのであろうか。ある者は、この件を道徳的教訓の例証として取り上げ、異人種結婚の危険性、もしくは不適切さを論じるかもしれない。<sup>11</sup> ヴェニスの一部のracistたちは、このような結果にほくそえみ、凱歌をあげることだろう。また、Othello、そしてIagoそれぞれの動機をめぐる論説、いわゆる原因論的言説が巷に溢れることになるかもしれない。人々は事件の真相について様々な推測を行うのであろう。

現代における『オセロー』の読者、そして観客は、このヴェニスの人々の末裔なのである。では、私たちは、Othello について、正当な形で推測し、レポートすることができるであろうか。私たちは、劇の冒頭から、Iago の虚偽の報道に立ち会わされてきた。その際に、劇世界に加わって fact-checker になることができないある種のもどかしさを私たちはずっと感じていたのである。一言、誰かが「Iago のレポートは嘘である」と声をかければ、Othello と Desdemona は救われていたのだ。このことに対する罪悪感、そして贖罪したいという気持ちを抱くのは、私だけではなからう。そういえば、自らの命を絶つ前、Othello は次のように懇願していた。

I pray you, in your letters

When you shall these unlucky deeds relate,

Speak of me as I am; nothing extenuate,

Nor set down aught in malice. (5.2.336-39)

彼は、自分の事、そして自分が犯した事件が報道されることを強く意識しているのである。そこには、時の人として「ありもしないこと」を書きたてられるかもしれないという懸念があったのであろう。実際、第二の Iago が登場して中傷記事を書く可能性も否めないのである。この最期の言葉に、ニュース社会に生きた Othello の意識の在り方を垣間見ることができる。そして、「ありのままの自分」を書いてほしいという願い、正当な報道を求める Othello の姿に、私はある種の物悲しさを感じずにはいれないのである。果たして、私たちは Othello についてどのように報道していくべきなのか。『オセロー』は、レポーターとしての私たちのスタンスを問うているのである。

\* 本稿は名古屋大学英文学会第 43 回大会 (2004 年 4 月 17 日、於名古屋大学) における口頭発表に加筆・修正したものである。

## 注

- 1 『オセロー』の制作年代については、Sanders 2を参照。
- 2 報道と公共性の問題については、吉岡 40-41を参照。
- 3 16世紀におけるヴェニスとオスマン帝国の対立については、Vaughan, 特にchapter 1を参照。
- 4 ここで、劇の第二の舞台であるキプロスについて検討しておかねばならない。地中海東部に位置するこの島は、軍事上、そして貿易上の理由から大きな重要性を持ち、ヴェニスとオスマン帝国はその所有をめぐる争っていた (Vaughan 14)。キプロスを特徴付けるのはこのような政治的緊張状態、そして緊迫感である。また、ヴェニスからキプロスへと場面が移されることの意義も考察しなければならない。報道という点については両者において価値観は共有されていると本論では考えるが、キプロスにおいてはその地理的特性ゆえに、孤立感と閉塞感が生じる。また、先程述べた緊張状態、そしてヴェニスの元老院の直接的支配からは物理的に隔離されているという事実のため、そこでの秩序は常に不安定な状態にある。このような条件は人々を一種のヒステリー状態に陥らせることになり、それは彼らの報道に対する意識をより過敏なものとするのである。
- 5 O. Dir. Tim Blake Nelson. GAGA, 2001.
- 6 O. J. Simpson 事件と『オセロー』との関連性を扱ったものとしては、例えばHodgdonを参照。
- 7 O. J. Simpson 事件の詳細については、井上及び久保田を参照。
- 8 “honest”という語の意義の多様性については、Empsonを参照。
- 9 PCCについては、次のホームページを参照。<http://www.pcc.org.uk/>
- 10 ニュースを作り上げたIago自身も、この事件の重要な登場人物として紙面に現れるにちがいない。この皮肉な展開は、虚偽のニュースを作り続けた後に自らがニュースの対象となってしまったGlassの運命とも重なり合う。だが、Iagoは果たしてこのような結果を予測していたのであろうか。もしそうならば、彼の一連の行動は自虐的なまでのジャーナリスト魂として評価せねばならない。
- 11 エリザベス朝におけるパンフレットには、事件から道徳的教訓を抽出しようとする傾向が多く見られる (Clark 95)。

## 引用文献

- 浅野健一『マスコミ報道の犯罪』講談社, 1996.
- Bissinger, Buzz. "Shattered Glass." *Vanity Fair* Sep. 1998: 176-90.
- Clark, Sandra. *The Elizabethan Pamphleteers: Popular Moralistic Pamphlets 1580-1640*. London: Athlone, 1983.
- Empson, William. *The Structure of Complex Words*. London: Chatto & Windus, 1952.
- Galtung, Johan and Mari Holmboe Ruge. "The Structure of Foreign News." *Journal of Peace Research* 2 (1965): 64-91.
- 原寿雄『ジャーナリズムの思想』岩波書店, 1997.
- Hodgdon, Barbara. "Race-ing *Othello*: Re-Engendering White-Out." *Othello*. New Casebooks. Ed. Lena Cowen Orlin. NY: Palgrave Macmillan, 2004. 190-219.
- 井上一馬『無罪—O. J. シンプソン事件と21世紀のアメリカ』河出書房, 1996.
- 久保田誠一『グレイゾン—O. J. シンプソン裁判で読むアメリカ』文藝春秋, 1997.
- McQuail, Dennis. *Mass Communication Theory: An Introduction*. London: Sage, 1984.
- Moisan, Thomas. "Repetition and Interrogation in *Othello*" *Othello: New Perspectives*. Ed. Virginia Mason Vaughan and Kent Cartwright. NJ: Associated UP, 1991. 48-73.
- 村上直之『近代ジャーナリズムの誕生』岩波書店, 1995.
- Nashe, Thomas. "Pierce Penniless His Supplication to the Devil." *The Unfortunate Traveller and Other Works*. Ed. J. B. Steane. London: Penguin, 1972. 49-145.
- Rojek, Chris. *Celebrity*. London: Reaktion, 2001.
- Sanders, Norman. Introduction. *Othello*. By William Shakespeare. Updated Edition. Cambridge: Cambridge UP, 2003. 1-61.
- Shakespeare, William. *Othello*. Ed. Norman Sanders. Updated Edition. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Turner, Graeme. *Understanding Celebrity*. London: Sage, 2004.
- Vaughan, Virginia Mason. *Othello: A Contextual History*. Cambridge: Cambridge

UP, 1994.

Voss, Paul J. *Elizabethan News Pamphlets: Shakespeare, Spenser, Marlowe and the Birth of Journalism*. Pittsburgh: Duquesne UP, 2001.

吉岡至 「ニュースと情報」 田村紀雄, 林利隆編『ジャーナリズムを学ぶ人のために』  
世界思想社, 1993.

## Synopsis

News and Celebrities in *Othello*

Miki Nakamura

Stephen Glass, an associate editor of *The New Republic*, fabricated a legion of reports in the latter half of 1990s. The incident made sensational news and exposed a dilemma facing reporters in modern society: which is better, to produce colorful and provocative news, or to report the truth literally? Fabrication, news production and the reporter's dilemma—these are points at which Elizabethan England, *Othello* and modern society come into contact. As Paul Voss points out, England in the 1590s witnessed a news revolution and a great and durable interest in news grew in that period. The end of the sixteenth century marks the birth of the “news society” in which a large quantity of news is produced/received. *Othello* (1603~1604) inherits the interest and reshapes the dynamism of the news society as its structural principle. This paper aims to analyze news production and reception in *Othello*, referring to the media and celebrities today.

Venice was the locus of trade between the west and the east, and the flow of commodities as well as people entailed the flow of news. In the news society of Venice, people give priority to reports, news and public opinion. What others say and how they are reported truly affect their sense and behavior. Othello is a typical character who lives through the media in Venice. His status as a celebrity makes him the focus of public attention, and thereby he not only enjoys acclamation but is susceptible to a barrage of slander.

It is Iago who makes use of the celebrity Othello for his journalistic design. As a reporter in the play he shares with modern journalists three traits: curiosity, a penetrating insight into news value and commitment to sensationalism. What is more, he knows that reputation is arbitrary and could be altered by managing news, which enables him to control Othello,

who regards reputation and fame as essential to himself. First Iago appears in the play as an “honest” reporter who tells the truth, though he actually reports false news. Not content with the task of reporter, he embarks on fabricating a fact like Glass. The fact he plans to make up is a love affair between Cassio and Desdemona. Here we can surmise his ambition: since the Turkish fleets have gone, the news of the impending war does not sell any more; accordingly, people demand other news and someone needs to produce it at any cost to satisfy them; it is likely that the news of the Othello family’s turmoil will be marketable since the couple is famous. Eventually, Iago aims to produce news on his own and become a director of the ongoing events.

Othello never doubts Iago’s reports on his partner’s infidelity. There are three reasons for his credulity. Firstly, Othello is very sensitive to people’s remarks which could tarnish his fame: the rumor of being a cuckold would be fatal for him, so he cannot dismiss it easily. Secondly, he does not interpret news critically and accepts all the reports and inferences as truth. Finally, Othello never checks the news source of Iago’s reports and listens carefully to others’ reports. As a result, he tortures himself with an imaginary slander, “a cuckold.”

In the final scene Emilia, a literally “honest” reporter, tells the truth and the reporter Iago loses credit. However, his plan as producer/director is accomplished in that a shocking scene of murder and suicide is presented on the stage. The news of the event would be reported in Venice and people would talk about Othello the murderer: in this sense, we can conclude that he is a victim of the news society. Whatever responses Venetians should make, we the readers/audience also have responsibility for reporting the event, the truth and Othello. Since we were not allowed to enter into the world of the drama as fact-checkers and couldn’t save Othello from ruin, we now need to “speak of him as he is” as a witness. *Othello* thus questions our stances as reporters.